

D i s c 型一循環式浸漬汎床の処理性能に関する研究(Ⅰ)

—粉末活性炭溶液処理における沈殿効果とエノール模擬廃水の処理について—

花園高等学校教諭 正会員 幸山利久

1.はじめに；生活系廃水処理の単独浄化槽、合併処理プラントを含めた淨化槽法が昨年(昭和58年)5月18日に国から公布され、より厳しく水質が規制されるようになつてきました。このようなかで循環汎床法は維持管理が容易であり、処理能力が高く、等の点から多く採用され、その優位性を發揮していきます。筆者は、自ら考案したd i s c型循環式浸漬汎床法について前者と同様、沈殿効果が優れていた等の点から装置の特性について両者を対比しながら物理的効果と生物学的効果の二つの観点から研究を進めてきました。今回はエノール模擬廃水の処理について、両者の処理能力の特性を比較検討し、さらに物理的効果としての沈殿効果と生物学的効果の二つの効果を考慮した接触生物酸化動力学の導出と共に若干の検討を行つたので発表します。

2. 実験装置及び方法；実験装置のフローラインを図-1に示す。採用したd i s c型は先に報告したものとほぼ同じで、ろ過の引き抜き板と液相中の基質との接触率を高めるために、d i s c板、主循環筒の回転用モーターと槽天板に設置した東とd i s c板を3枚にした東が異なり、実験内容積は3.648(l)のオクを使用した。循環汎床法は塗り製キヤードの切片を1.41kg詰め、実験内容積3.51lのものを使用した。エノール模擬廃水はエノール1g、グルコース5g、BOD希釈水に使うA、B、C、D液を各10ml加え、11としたものを使用した。タンク内MLSSはd i s c板の循環筒、汎床と槽内の廃水で満たし、この廃水を均一に混合し測定した。

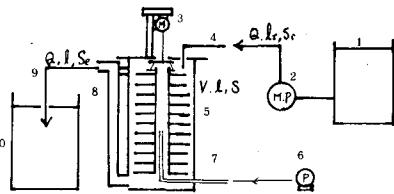


Figure-1. Schematic diagram of the submerged circulation pipe with parallel multi-plates system. 1:storage tank, 2:micro-tube pump, 3:motor for rotating the submerged circulation pipe, 4:, 7:conveying tube, 5:submerged circulation pipe with parallel multi-plate system, 6:air pump, 8:outlet, 10:effluent
Q:flow rate (ml/min.) ; COD (ppm) in inlet,V:volume of filter bed tank,L:COD (ppm) in outlet,S:MLSS (ppm) in filter tank,S_i:MLSS (ppm) in outlet

3. 実験結果からみる結論

3-1. 沈殿効果による粉末活性炭溶液処理のモデル化；先に報告した通り、粉末活性炭等のエロイド溶液を循環式浸漬汎床で処理するときエロイドの除去速度は次の式に従う

$$-(dc/dt) = k(n) \cdot C \\ \dots \dots \dots (1)$$

ここで、 $t = 0$ 時 $C = C_0$ 、 $t = t$ 時 $C = C$ の条件で解き対数式とすると

$$\log C = \log C_0 - \{k(n)/C\} \cdot t \\ \dots \dots \dots (2)$$

となる。d i s c型で枚数を変えて処理したとき、各d i s c板枚数における濃度の経時

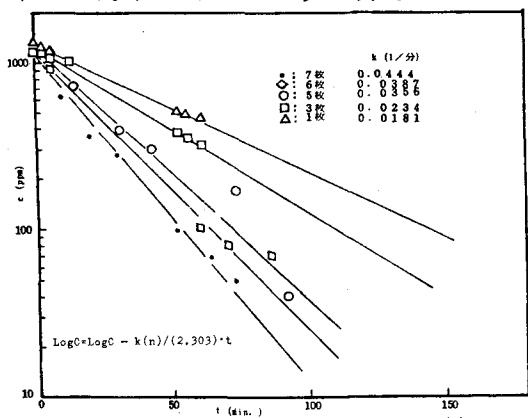


Figure-2. Relationship between $\log(c)$ and t for computing $k(n)$ every number of disc plates by drawing method in submerged circulation pipe with parallel multi-plates system. initial carbon concentration 1300(ppm) temperature 20°C, air flow rate 830(ml/min).

変化を(2)式に従い片対数グラフにプロットすると図-2の関係が得られる。图-2はとかく(1)式が成立することがわかり、浮遊する活性汚泥、コロイド状の高分子を含む染色廃水を処理するときにも適用できることを考える。また、図-2の枚数と速度定数の関係は、 $n=1$ 、元、3---であり、 n の関数である $k_c(n)$ の平均変化率は、さざれ目1の1階差分係数で与えられることがわかつていた。詳細は先の報文を参照されたい。

3-2. DISC型-循環活性汚泥法と循環活性汚泥によつて1-ル模擬廃水の接触生物酸化

物理性能にてりて、21°C、通気量850(ml/分)で前述のとて1-ル模擬廃水を処理し、表-1の結果を得た。この表から実験を重ねてみるとDISC型では循環活性汚泥に比べ多くMLSSが減少する傾向があり、COD除去率がより下がる傾向にある。これは、この枚数でのDISC板の次段効果がより少しが起つたものと考える。先に報告した通り、次段の効果はDISC板の増加によつて放物線に増加する特性があり、DISC板を僅にすればMLSSの流出はなくなり、COD除去率は大幅に増加すと考へられる。

3-3. 循環式浸没活性汚泥法の次段効果を考慮した接触生物酸化動力学の導出と若干の検討

以上述べたようにコロイド性の物質を含む廃水を処理する場合、コロイド状のものは(1)式に従い除去され、二工程における次段効果を考慮した接触生物酸化の動力学は生物酸化と物質収支を次の五つの式が建立する。

$$-(dI_c/dt)_{ad} = k_c \cdot I_c \quad \dots \dots (3) \quad -(dI/dt)_{ad} = (k_c \cdot I_c \cdot S_b) / (k_s + I) \dots \dots (4) \quad (dS_b/dt)_{ad} = Y \cdot (dI/dt)_{ad} - b \cdot S_b \dots \dots (5) \quad V \cdot (dI/dt)_T = V \cdot (dI/dt)_{ad} + Q \cdot I_c - Q \cdot I - V \cdot (dI_c/dt)_{ad} \dots \dots (6) \quad V \cdot (dS/dt)_T = V \cdot (dS_b/dt)_{ad} + Q \cdot S_c - Q \cdot S_b + V \cdot (dS_e/dt)_{ad} \dots \dots (7)$$

ここで k_c : 次段速度定数、 I_c : CODコロイド成分、 S_b : MLSSや活性汚泥濃度、 $-(dI_c/dt)_{ad}$: 液相中から除去されたCODコロイド成分の除去速度、 (dS_b/dt) : 生物酸化による活性汚泥濃度の変化速度、 $(dI/dt)_T$: 汽床内液相中の全CODの変化、 $(dS/dt)_T$: 汽床内全MLSSの変化であつて、 $(dS_e/dt)_{ad}$ は次段効果による汽床内液相中のMLSSの変化速度であり、コロイドCOD成分と液相中MLSSの比を γ とすると、次の式を得た。

$$\gamma / S_e = t \dots \dots (8) \quad (dI_c/dt)_T = r - (dS_e/dt) \dots \dots (9)$$

これらの動力学はコロイド成分を含む廃水処理の動力学なりて、流入廃水中にコロイド成分を含まない1-ル物理の動力学の検討については当日発表する予定である。

文献 1) 幸山; 水処理技術, Vol. 24, No. 12, 1983